

ジュニア部門 〈母への思いに関する作文〉

中高校生部門 佳作

私のお母さん

お茶の水女子大学附属中学校

濱^{はま}

口^{ぐち}

芽^め

生^いさん

〔応募動機及びコメント〕

私は、自分の作文がまさか選ばれるとは思っていなかったのですが、学校の担任の先生から佳作に選ばれたという電話を頂いたときは、とても驚きました。連絡を頂いたのが定期テスト最終日だったこともあり「なにか提出物でも出し忘れたかな？」などハラハラしてしまいました。本当にこのような賞をいただけ嬉しのです。このコンクールを通じて私は、母の大切さ、偉大さに改めて気づくことができました。ありがとうございます。

私には母がいる。面倒臭がりな母がいる。何にでも、ぶつぶつと小言をならべるし、私が少しでもへまをすると「まったく不器用なんだから。」とため息をつかれる。ため息ぐらい、何ともないと思う人もいるかもしれないが、ため息というものは不思議なもので、ため息をついた方も、つかれた方も、心がどんよりと曇り、体が重くなり、苛苛してくる。そしてその苛苛を解消するべく、また私のへまを見つけては、ため息をつく。まさに負の連鎖である。しかし、私はへまをした時はまだ良いと思う。一番恐ろしいのは世界中の学生達の敵、テスト：の時の母である。先ほど登場した、ため息は勿論のこと、小言そして無口になるという史上最悪のトリオがやってくる。小言は、ぶつぶつと同じ内容を繰返し、やっと終わったと思うと、ぼこぼこため息をつく。そして最後は話しかけても何も答えない。俗に言う無視というやつだ。たしかに、私が文句を言われないような点数をテストでとれば全てが解決だ。しかし、悔しいが私は器用ではない。寧ろ不器用な方だ。だから私はいつも史上最悪トリオの攻撃を真正面から受けなければならぬのだ。このように、母は口うるさくて、怒ると色々面倒臭い。

しかし、「母親なんて、うるさいだけ」と思っていた私に、母親のありがたさ、尊さを教えてくれた出来事がある。

ある日、母が「最近胸が痛い。」と言った。その時私は宿題をやっている、軽く受け流した。「どうせすぐに治るだろう。」と思っていたからだ。しかし、一週間、二週間たっても痛みは消えず、前よりも痛くなってきた。さすがに私たち家族も本人自身も心配になり、お医者さんに診てもらおうことになった。お医者さんに診てもらおうと「検査をした方が良い。」と言われ検査をすることになった。私は「まさか重い病気なのではないか。」とうつすら感じた。後日出た検査結果に私たちは青ざめた。母の検査結果は、乳癌だった。私は、一瞬意味がわからなかった。検査結果を聞いた母は意外と平気そうな顔をしていて「そんな感じ

がした。」と苦笑していた。私にはわからなかった。なぜ平然としてられるのか。母の癌は左右両方にあったが幸い左の方は少ししか転移していないそうだった。しかし、癌なのだ。死んでしまうかもしれない重病だ。なのに、なんで笑っていられるのだろうか。私はショックで涙があふれた。元気だった母が死んでしまうかもしれない。私の前から居なくなってしまう。そんな悲しすぎる。まだ話したいことだった。たくさんあるのだ。別れるなんて、やだ。すると、泣いている私に母は優しく言ってくれた。「私だって死ぬのは怖いよ、だけど大丈夫死なないから。」私の気持ちを読みとって言った言葉だった。不思議だった。なんで私の気持ちがわかったのだろうか。私は「お母さんだからかなあ。」と思った。「私の、私だけの、たった一人のお母さんだから、私の気持ちがわかるんだ。」と。

手術も無事、成功し母は毎日元気に過ごしている。生きている。それだけで良い。それだけで怒ることもできる、泣くこともできる、笑うことだってできるのだ。

私には母がいる。文句ばかり言って、うるさい母だけど、世界に一人しかない、私のお母さんだ。